

COVID-19下のハイブリッド授業

—SDGsを導入したActive Learningの実証研究—

岡多枝子 三並めぐる 眞鍋瑞穂 永江真弓 村上早苗 藤田碧

人間環境大学松山看護学部

1. 目的

2020年、COVID-19 (Coronavirus disease 2019) 感染拡大の影響で筆者らの大学も遠隔/対面のハイブリッド(前期当初は遠隔・後半は対面、後期は対面)授業を余儀なくされた。筆者らは年度当初の「遠隔授業」に、大学教育の質保証に向けたActive learning(以後、AL)にSustainable Development Goals(以後、SDGs)の視点を導入した実証研究を行ってきた。その結果、学生から、①On-lineが地球規模の感染予防に有効でありSDGs「誰一人取り残さない」「健康と福祉」に貢献する、②授業に集中できるので学習効果が高くSDGs「質の高い教育を皆に」保障する、③再視聴で知識が定着・全国から受講できて通学費用・時間の節約でSDGs「エネルギー・環境保全」に寄与するなど、肯定的な評価を見出すことができた(三並・岡2020)。しかし、「遠隔/対面のハイブリッド授業」に関する先行研究は管見の限り寡少であり、リアルタイムで進行・変化していく授業に関する実証的研究は重要である。そこで本研究では、ハイブリッド授業にSDGsを導入したALのレリバンランス(整合性・意義)の検討を目的とする。

2. 研究倫理

学生に研究概要・匿名性確保・提出有無での不利益は無い旨を説明、承諾書提出で研究への同意を得た。

3. 方法

A. 対象としたハイブリッド授業

- 1) 「遠隔授業」：看護学部前期の1年生選択基礎科目「社会保障論」、3年生選択科目「健康相談活動論」「公衆衛生看護援助論Ⅱ」を5月中旬-6月末に、4年生「看護研究」を4月-6月末に行った。
- 2) 「分散授業」：1年生選択基礎科目「社会保障論」、3年生選択科目「健康相談活動論」「公衆衛生看護援助

助論Ⅱ」を6月末-7月末に行った。

- 3) 「対面授業」：1年生選択基礎科目「家族社会学」、必修科目「社会福祉学」、2年生選択科目「公衆衛生看護援助論Ⅰ」、3年生選択科目「学校保健」を9月中旬-1月中旬まで行う。4年生「看護研究」を6月-10月に行った。

B. 授業構成

- 1) 「遠隔授業」：学生にData Dietした資料などを事前にMail送信して、授業のレディネスを高めた。以下に1年生の実践例を記す。On-line入学式など大学入構不可の為、On-line環境やPC操作サポートを行い、授業はMicrosoft社TeamsとGmailによる会議を併用した。大学ポータルサイトからコマシラバスを閲覧して授業概要を共有。テーマ別グループ編成、各グループで立候補したMail係がtrial and errorしながら学生とObserverの教員から成るGmailgroupを作成してMail会議を開始。leaderや発表係などの係決め、グループ学習と発表資料(PPT)作成など、対話的で深い学びを喚起するGroupworkを構築した。
- 2) 「分散授業」：学生は自宅からOn-lineでの遠隔授業と大学での対面授業に隔週で交互に参加した。
- 3) 「対面授業」：従来の教室より広い教室で、感染予防対策を取りながら対面授業を実施中である。

C. 研究対象・質的研究法

- 1) 研究対象：学生が作問したテスト(岡・眞鍋・三並2018)や、COVID-19とSDGsの視点を加味したレポート・グループ発表資料(PPT)を対象とした。
- 2) 質的研究法：共同研究者で狭義のKJ法(川喜田1986)による質的研究を行った。川喜田の理念を踏襲しつつもA4用紙上でグループ編成・配置し全体図解を作成、PublisherやPowerPointを活用するなど汎用化の工夫を重ねた。

1 本稿の執筆時点(2020年11月)。以下、同様。

4. 結果

KJ法²による質的研究の結果、【ビフォーコロナから臨時休校】【学びの覚醒】【教育変革】【貧困問題】【対面授業だ!】【協力・発表・評価】のシンボルマークで表される6つの島から構成されるKJ法全体図解が完成した。以下に、島ごとの内容を叙述する。

【ビフォーコロナから臨時休校】学生は、「COVID-19は大事になると思わなかった」と、『年初は深刻さを認識していなかった』が、臨時休校で、『パンデミックの影響で遠隔授業になってしまった』と「見る見るうちにCOVID-19の時代が変わった」と驚いていた。

【学びの覚醒】「社会保障論の最初の授業で憲法25条（生存権）条文を覚えた」「パソコンの向こうで積極的に答えている人やGmail会議で係に手を挙げてくれる人、送信方法を教えてくれた人がいた」「自分もリーダーになるよう努力したい」と、1年生は『初めてのオンラインでドキドキ、多くを学んだ』、「勉強・班活動を頑張りたいが先ずPPTを覚えない」など、「遠隔授業で新たな学びを経験する」姿が見られた。

【教育変革】「遠隔授業は感染防止に貢献している」「住み続けられる街やパートナーシップと感染予防は関係する」「本音トークでテーマを多角的・批判的に思考した」など『対面より優れた部分も多い』との声も聞かれた。「日本はIT化が遅れている」「eラーニングはコストを削減と質の高い教育を実現できる」など「遠隔授業が新たな教育の可能性を示す」としていた。

【貧困問題】「経済大国アメリカの支援が無いとWHO感染症対策に支障が出る」「先進国さえ医療不足。発展途上国の貧困・生命が脅かされる」「アルバイトが出来ず学費不足で生活を送りづらい」など、「生きていくことが脅かされる」との声が聞かれた。

【対面授業だ!】「やっと大学に入構できた」「大学で友達と授業に参加できた」「リアルに学び合えた」など「学友との出会い・再会が嬉しい」との声が満ち溢れた。

【協力・発表・評価】学生は対面授業で「良いテスト問題を作る人が多い」「友達のPPTが分かりやすい」「プレゼンテーションが上手だった」など「相互に学び合いながら深まっている」とことを評価していた。

5. 結論

本研究ではCOVID-19の影響で遠隔/対面のハイブリッド授業を余儀なくされる中で、それ以前から行ってきたSDGsを導入したALのレリバンズ（整合性・意義）の検討を行った。

学生たちは当初、【ビフォーコロナから臨時休校】までの世界状況の急激な変化に唖然とするが、遠隔による新たな【学びの覚醒】を経験して、【教育変革】への期待がみられた。一方、経済悪化で自他の【貧困問題】に直面する姿も見られた。感染低下による分散授業では学友たちとのリアルな学びに【対面授業だ!】と歓声上がり、全面对面授業では【協力・発表・評価】のInteractiveな学びを深めていた。

また、「国際感覚の醸成」や「感染防止への当事者意識」、「オンラインによる学習効果」にはネクサス（相互の関連）がみられた。

COVID-19の動向が見通せない中で、今後、遠隔授業への揺り戻しの可能性もある。しかし当初、懸念された学生の遠隔授業への移行は、本研究の結果に於いては「柔軟な着地」が示された。特に、Teamsの活用やPPT作成に関しては教職員以上に操作に長けている学生も散見される。また、構内立ち入り封印期間の反動か、学友・教職員とのコミュニケーションや授業に対するMotivationが例年になく高いと感じられる。1年生にその傾向が強く、対話や教え合う活動が活発である。学生は遠隔授業のメリットを評価し、分散授業で学友との出会いを喜び、対面授業でInteractiveな学びが加速していた。

今後さらに、教員が「固定観念」から脱して新たな教育観・教育方法を獲得するための複眼的で継続的な実証研究が求められている。

【付記】本研究はJSPS科研費JP17K04276の助成を受けた。

文献

- 川喜田二郎 (1986) KJ法一渾沌をして語らしめる. 中央公論新社
三並めぐる, 岡多枝子 (2020) 「大学教育の質保証」に向けた遠隔授業・卒論指導・キャリア支援. 国立情報学研究所. 第9回「4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」
岡多枝子, 眞鍋瑞穂, 三並めぐる (2018) 学生がテスト問題をつくる シリーズ編集 中井俊樹 編集 小林忠資・鈴木玲子, p. 55

²KJ法図解は、元ラベルからのグループ編成プロセスが全て把握できる省略の無い図解であり、元ラベルからのグループ編成によって「表札」と呼ばれる概念に統合され「島」と呼ばれる象徴的な概念が付与されるとともに、各島に「シンボルマーク」と呼ばれる象徴的な概念が与えられる。さらに関係線によ

って、混んとしたデータ群が明確に構造化され本質把握へと創造的に導かれる。本稿では元ラベルを「」、第1段階の表札を『』、最終的な島の表札を「」、シンボルマークを【】で表現した。筆者のうち2名は「KJ法研修プログラム」を受講済みである。